看護労働に関するアンケート調査

— 看護者の機械導入意識について —

○小川 鑑一、守安 貴彦、池畑 弘、小野寺直樹（東京電機大学）
大久保 祐子、小長谷百絵（自治医科大学看護短期大学）

Questionnaire Survey for Nursing Heavy Duties

— On the consciousness of nurse supporting machines —

K. Ogawa, T. Moriyasu, H. Ikehata and N. Onodera (Tokyo Denki University)

Y. Okubo and M. Konagaya (Jiti Medical School, School of Nursing)

1. はじめに

1994年10月に「看護力労働に係わる看護職員・介護職員へのアンケート調査」を現場看護者500人を対象に行い357人からの回答を得た。質問は看護力労働によって腰痛を引き起こした場面、看護の世界へ機械を導入することの賛否とその意見などである。機械導入に「反対」した人は数名と極めて少なく、「賛成」と「どちらとも言えない」が半々であった。どちらとも言えないと答えた多くの回答者も条件付きで賛成であった。本稿は、将来、看護補助機器を看護の現場に導入するにあたり、現場看護者が機器に抱くイメージと導入に対する意見を整理した結果について述べる。

2. 看護補助機器導入の賛否と看護者が機器に期待する機能について

現場看護者357人の看護補助機器（ロボットも含む）導入賛否の回答者数を図1に示す。どちらとも言えないと応えた多くの回答者も患者の安

図1 看護業務への機械導入の賛否

全、安楽が保証されれば賛成ということが自由記述欄に明記されていた。したがって、看護者は後述するように人間的温かみ、人間の優しい手で患者を見る本来の姿を理想としているが、現状を考慮すると、やむをえず機械導入に賛成していると思われる。

アンケートの設問として、看護補助機器に望まれる機能、価格、便利さなど22項目を提示し、そ

図2 看護補助機器に期待する機能

の中から回答者自身が好ましいと思う1位～5位までの5項目を選んでもらった。図2は選ばれた22項目の順位を示す。操作が楽なものが第1位であるのは、忙しいために準備に時間がかかるような機器はいらないという意見が比較的多かったことから、操作の難易度に関心が集ったものと思われる。

図3は選ばれた上位9項目の中での順位であ

図3 看護補助機器に期待する機能と順位

る。例えば図左下の「人間に近いもの」では、1位に多くの回答者が賛成したが、2位以下は極端に少なく、他の機能を選んだことを示している。

上位9項目の中に人間補助、間接的に人間補助、人間に近いものが選ばれている。これに対し、14位に人間代行のもの（図2参照）がある。これより看護者にとって代わるもの（ロボット）を望むのではなく、看護の負担を軽減する補助的な機器を希望していることが読み取れる。

3. 看護補助機器導入に関する回答者の自由意見

看護補助機器に関する回答者の自由意見についてまとめた一部を以下に紹介する。

（1）看護の現場 現状では、業務のなかで腰痛を起こす看護婦は後を断たず、腰痛に悩む看護婦は多い。腰だけではなく、手首、首などの故障が増え、看護婦の方がまいってしまう。これまでの看護の世界は女性だけの職場という古い考え方は捨て、患者に快適、安楽を求めるなら、人間的な係わり場面を失わない範囲でロボットを含む機械と同時に男性看護者の進出も必要かと思う。

病院というところは、ともかく狭く不便な所である。寝たきりになり長期入院ともなると身の回りの物が増えます狭くなる。機械を使うなら小さく、邪魔にならず、どんな角度からでも使えるものでないとだめである。

（2）看護機械化の難しさ 患者の病状、体格、体重は様々である。また、体位や麻痺状況によっても看護動作は異なる。患者の行動観察を行うと「昨日は顔を拭くために手を動かせたのに、今日は手の動きが悪い」というように患者の容態は日によって異なる。脳卒中後遺症、じっとしている脳性麻痺、緊張すると余計動くなど患者の病状は様々である。こうした患者一人一人によって身体を動かす条件が異なるので、個々に対応できる機械は大変難しいのではないかと心配する。

（3）看護機械の導入は反対 機械は感情がないので物足りず、微妙な調整は出来ない。機械

（ロボット）という看護と離れ、看護の意味が失われるので賛成出来ない。患者の周りを機械で囲み、機械が患者の直接ケアを行うなど、必要以上に看護動作を機械に代えることは反対だ。

（4）看護に必要な心のふれあい 看護力援助機械があれば、看護婦は大変助かる。しかし、心があつての援助で患者は救われるので、機械的、事務的援助は、看護婦の立場からしたくない。機械化により看護者と患者とのコミュニケーションが不足したり、信頼感を喪失したりすることも

ある。機械開発も大切だが、ボディメカニックスをもっと考え、機械に頼らずなるべく人と人とが接したい気持ちが大きい。

（5）患者に安心・安楽感、人間的温かみを

患者が安心感を抱き、安全・安楽が守られ、つぎに看護婦の腰の負担が少なくなるような補助機械を望む。看護は患者という弱い人間を相手にするから心の通う、温かみのある看護婦の手が一番である。患者がしゅう恥心を抱くような行為に対して機械を使用すると、その患者は安心することもあるかもしれない。

（6）看護の現場にこんな機械がほしい ①ベッドからストレッチャーや車椅子への移乗が楽に行える補助機器、②患者の体格を考慮し、便所（排泄）、入浴を支援する機器、③オムツ交換／体位変換補助機器、④ベッド上でのずり上げ補助機器／シーツ交換補助機器、⑤「今から動きまです、両手はお腹の上へ置き身体の力は抜いてください」というように説明や気づかいを音声で伝える（しゃべる）機器

4. おわりに

筆者らは、高齢社会の中での看護労働を間接的／直接的に援助するため、以下の二項目を主眼におき研究を行っている。

（1）看護者が行うボディメカニックスの有効性を定量的に表現する。その効果を看護教育において強調し、看護者の腰痛発生を抑止する

（2）看護者力労働（作業）を支援する看護補助機器開発に役立たせるため看護動作を人間工学的に研究し、力学的データを取得する

今回のアンケート調査研究は、看護者が抱く看護の世界への機械導入に対する賛否とそれに関する自由意見の収集にある。回答者の多くは、看護現場へ看護補助機器を導入することにより、看護・力作業の負担は軽減すると考えている。機械に操られる患者の立場に立った場合、患者の気持ち（心、精神）、人間的温かみ、安心感、安楽感、危険性、コミュニケーション、リハビリテーション効果など、本来の看護精神に係わる配慮を多くの看護者が抱いていることがよく理解できた。そのような不安はあるものの、現実を踏まえると看護の世界に機械を導入することは、おおむね賛成の意向が今回行ったアンケート調査によって伺うことができた。

本アンケート調査に見られる貴重な意見を参考に、今後は、看護労働に関わるデータの収集と看護補助機器の在り方について考えて行きたい。